98-02

札響くらぶ

第5号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

和やかな雰囲気に包まれた交流会

師走を目前に控えた11月27日夜、「札響くらぶ」の交流会が札幌コンサートホール「KITARA」で開かれました。会場は、あたかも、コンサートが始まるような雰囲気に包まれていました。50人あまりの会員と20人ほどの楽員が住まいの地域ごとに分かれてテーブルを囲み、これまでの交流会以上に一層親しみが増しました。

西区の女性会員の音頭による乾杯で始まった交流会は、終始和やかな雰囲気の中行われました。

オーボエの岩崎さんとファゴットの一戸さんは二重奏を披露してくださり、トロンボーンの田中さんらはご自分のトロンボーンを分解して、すてきな音を引き出す仕組みについて話してくださいました。コンサートではトロンボーンのサウンドにも一層注目（耳？）したいと思います。元ホルン奏者の札響事務局次長の吉田さんは、ゴムホースとジョウロを組み合わせて擬似ホルンの音を披露してくださり、場内に爆笑をよびました。オーボエの高井さんからはプレーヤーの素顔を垣間見る「味のある話」を伺いました。コンサートマスター・ニキティンさんの巧みな日本語のスピーチにも驚かされ「札響くらぶ」ならではの楽しい交流のひとときでした。

札響専務理事の野杁さんから札響の現状について話がありますと、会員の中から「定期会員をもっと増やしましょう。ご協力しますよ」との心強い声が上がりました。最後に、札響の新年に向けての活躍を祈って散会しました。

指揮者にきく

街の美しさが オーケストラにも影響を与える

井上 道義 さん

いのうえ みちよし

京都市交響楽団音楽監督

1997年12月13日、芸術の森アートホールでのリハーサルの合間に京都市交響楽団音楽監督の井上道義（いのうえ　みちよし）さんに、お話をうかがいました。井上さんは、12月16日に、札幌コンサートホールで行われた札響第397回定期演奏会の指揮をなさいました。

井上道義さんのプロフィール

1946年東京生まれ。
70年桐朋学園大学卒業。
71年グィド・カンテルリ指揮者コンクールで優勝。
76年日本フィルハーモニー交響楽団定期演奏会を指揮し、日本デビュー。
83年から88年まで新日フィル音楽監督を務める。
90年から京都市交響楽団音楽監督、常任指揮者に就任し、現在に至る。

―― 札響を指揮して、印象に残っていらっしゃることは。

井上 札響とは相当やっていますが、毎回印象が違います。非常に燃えている時とか、世代交替で事務局が替わって、これからどうなるんだろうなという時、それが動き出してうまくいかない時、それから、指揮者が替わって、音楽に対する姿勢が変わったとか、割と飛び飛びで来てますんで、印象がどんどん変わります。

この２年間くらいは、いい印象しか持っていないですけれど、５年くらい前、一度札響はダメになったのかと感じたことがあって、困ったことだと思ったことはあります。だから、浮き沈みというのはあるんだという気はします。

それを僕は感じても、割合とお客として、冷たく見て帰っていたような気がします。だから、どうしなくてはいけないという提案なんぞはしたりはしないのね。

ただ、僕は、これだけ都市として大きいところには芸術大学がないと、長い眼で見た場合辛いなと、前から思ってます。どうしても、オーケストラの楽員がよそ者、よそ者、よそ者。楽員が根を持ってない。もちろん北海道というのは、よそ者の文化で成り立ってきたところだから、それであまり構わないのかもしれないけれど。

長い眼で見ると芸術大学が必要

―― 楽員を養成するためにということですか。

井上 楽員でも、楽員じゃなくても、結婚したら子どもを生むでしょう。そして、その子が音楽家になりたいと言った場合、本当は育った所で勉強を始められるのが望ましいし、どこかに行ってもまた帰ってくるとか、やはり人間には生まれ育ったところが

大事だから。

たとえば、みんながみんなベルリンに行って、ベルリンに骨を埋める訳じゃないですから。それに、今の東京は、人が住める街として作られていないので、年がら年中、どこに行くにも１時間以上、２時間くらいかけて大々的に移動したり。そんなことをするのがいやになった場合に、ちゃんと帰る場所があってほしいと思うんです。そういう環境は、まだできていない。できたらいいんじゃないかと思います。

めちゃくちゃに気持ちがいい グリーン・コンサート

―― 札幌のお客の反応はいかがですか。

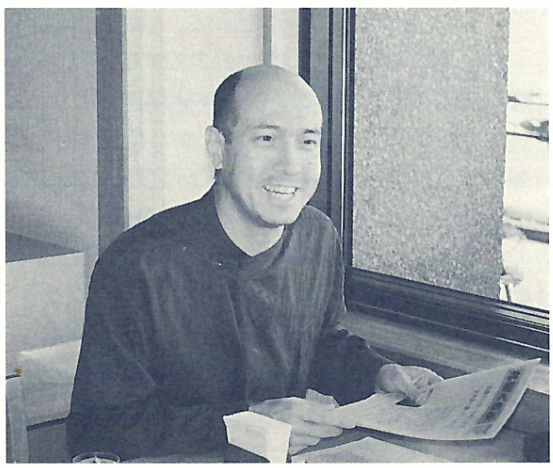
井上 反応はいいですよ。僕は、反応がいやだなと思ったことはないし、割合と楽しい音楽会ばかりやってこられたような気がします。

特に、市民会館でやった時は気持がいいですね。そして、グリーン・コンサートはめちゃくちゃに気持がいい。厚生年金会館は、ちょっと客席が遠い感じがするんだけど、それでも、そんなにスカスカにお客さんがいなかったということは、僕はあまり経験していない。

―― 道内を札響と回って、印象に残っているところはありますか。

井上 どちらもグリーン・コンサートでしたが、美瑛町とか、ちょっとした丘にある野外ホールでやった夕張。

グリーン・コンサートは、やはり印象に残ります。両親を連れて来たこともあったし、その時々の家族の思い出と結び付いていますから。それと、道内の街がどんどん変わっているという印象が強いです。



「札響くらぶ」を手にする井上さん

アートホールの前で

あと、札響の指揮をこちらからキャンセルしたことはないですが、１回だけ、台風で道がダメになって、お客さんが来られないというので、地方の演奏会がつぶれたことがありました。

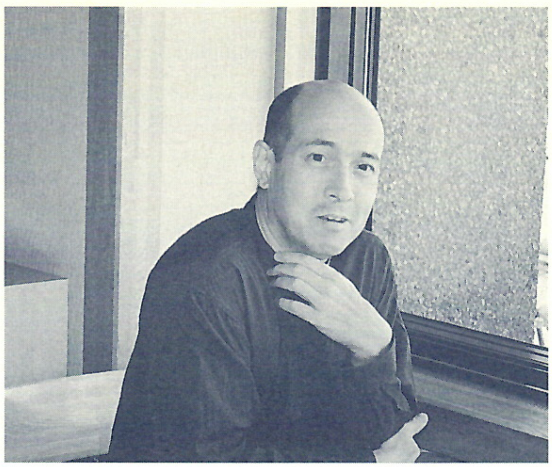
ボロっちい街に、いいオーケストラは育たない

―― オーケストラと地域との係わりについて考えていらっしゃることは。

井上 僕は京都のオーケストラをやっていたために、このことはすごく考えています。京都新聞に今まで38回連載したり、他にラジオ、テレビで発言したものは色々あります。

特に、古い歴史がある京都の中では、オーケストラというものが新しい存在として扱われるんですね。しかしながら、少なくとも200年や300年昔の音楽は演奏しますから、やっていることはかなり古い訳ですよ。

でも、オーケストラなどのヨーロッパで生まれた芸術文化を街の中に新しく創造しようということは、水道や路面電車のようなハード以外はやってこなかった、絵画とかそういうものは少しずつありましたけど。明治以降、あそこで「現代的な芸術」



が栄えたことはない訳です。

古い街をみんなで少しずつ壊して、新しいものにしようとしているけれど、その新しいものは何かというのが全然見えてこないですから、ただただ普通の街になりつつあるのが悲しい。まだ、札幌の方が新しいものはきれいに作られてます。京都の街の中は、かなりグチャグチャの状態です。

その街のつくりとか、美的感覚というのは、オーケストラにも非常に影響を与えます。だから、あまりにもボロっちい街に、いいオーケストラはあまり育たない。街はダメでも、オーケストラに思い切りお金をかけたピッツバーグとかクリーブランドなんかと違って、そこまでお金をかけないですからね、日本の地方都市は。

それでも、京都コンサートホールができてから、大きく変わりました。プラスに働きました。それから、劇場もホテルもデパートもある巨大な駅ができました。あれも、人々にじわじわ影響して、意識は変わってくると思う。

札幌もコンサートホールができ、また、その音質がはっきり言って、京都より良いですから、本当に期待できます。

好き嫌いをはっきり表現するお客の方が嬉しい

——　指揮者から見て、理想的な聴衆というのはありますか。

井上　現代では、聴衆の方が、楽員さんの音楽に対する意識より進んでいるということが、時々起こるんですよ。

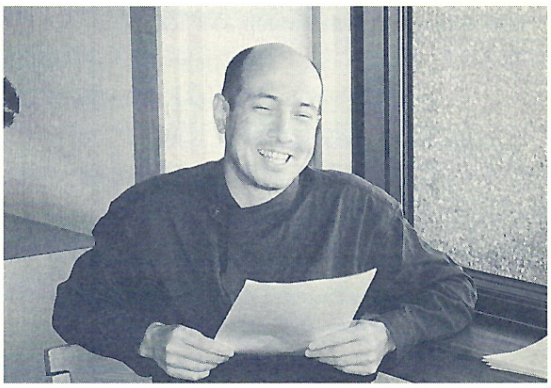
楽員さんには、オーケストラというのはこういうものじゃなくちゃいけないという固定観念が割とある。お客さんの方は、おもしろけりゃ何でもいいみたいな、割合にどんなことでも受け入れることがあるんです。

だから、理想的なお客さんなんて、僕は考えたことがないけれど、やっぱり世界的にはプラハ、ウィーン、アムステルダム、ロンドン、ミュンヘンなどの音楽都市のお客はいいです。東京のお客もいいですよ。白黒がはっきりしていて、あまり以前のように、悪い演奏にワイワイ拍手するようなことはなくなった。僕は、好き嫌いをはっきり表現してくれる方が嬉しい。

舞台が好きだから、指揮者に

——　指揮者になったきっかけは。

井上　ピアノやバレエを幼稚園の頃からやっていたし、中学の時から、指揮者をやろうと思ってました。実は14歳の頃、定年がない仕事をやりたかったので、「指揮！」と



ひらめいたのです。父親を見ていて、定年になって、まだ元気なのに、何で仕事辞めなきゃいけないんだって。

で、本当は、僕が好きなのは舞台なんです。音楽じゃなくてもいいんです。現実が嫌いだから、舞台が好きなんですよ、すごーく。だから、指揮者にならなくてもよかったんですけど、舞台の一つとして、指揮台に乗っているようなものです。舞台という場所で起こっていることが好きです。

——　オペラの指揮もなさってますよね。

井上　もちろん、オペラも好きだけど、オペラじゃなくてもいいんです、舞台であれば。舞台の方が本当だと思う、すなわち、フィクションが真実と感じます。世の中で起

こっていることよりも。

——　ライフワークとして取り組んでいらっしゃることは。

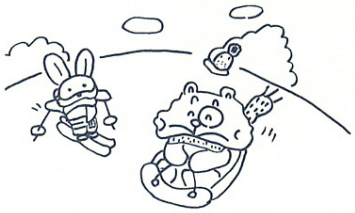
井上　そうですね、一生ライフワークとしてやっていくとは思いませんけど、ショスタコービッチを随分やっています。札響とはやっていないけど。

——　これからのご予定は。

井上　京都が随分長かったんですけど、音楽監督を辞めますので、ヨーロッパにまともに勝負を賭けたいと思ってます。

《臨時インタビュアの感想》

リハーサルの合間、芸術の森のレストランでのランチタイムにお邪魔しました。サーロインステーキ重を食べている井上さんを３人（札響事務局の吉田次長とカメラマンと私）で取り囲んでのインタビューに、「みんな食べないの？」と気を遣ってくださって、申し訳なく思っています。召し上がりにくかったでしょうね。　（T.K.）



札響物語　VI

楽員会（1）

どこの団体でもスタートの頃は混沌とした有様だと思います。ご多聞にもれず、札響もかなりばらばらの人模様でした。オーディションを受けて札幌に集まって初め顔を合わせた19人の正団員（プロの楽団員）は、生まれも育ちも音楽教育も音楽経験もすべてが違い、しかも平均年齢20歳の向こう意気の荒い楽団員でした。

正団員は昭和36年７月１日に初代常任指揮者荒谷正雄氏の音楽塾・札幌音楽院の２階の合奏室で初めて顔合わせをして以来、札幌市民会館での第１回創立披露札響定期演奏会が行われた９月６日までの２ヶ月間は、ひたすら練習の毎日でした。

練習のスケジュールは、月水金が午前午後の練習で正団員だけ、火木土は準団員も一緒に夜の練習でした。

この練習スケジュールが３週間ほど続いた後、正団員の中である問題が持ち上がりました。問題は「厳しいオーディションを受けて入団した正団員は毎日練習しているのに、準団員は週３回の夜の練習だけで自分たちとの差が大きくなる。」という不満でした。

週３日間毎日６時間ずつしぼられる正団員は人数も少ないこともあり、アンサンブルは目に見えて良くなってきました。

それに反し、準団員も入る夜の練習は人数が倍以上に膨らみ、技術的にも多少ばらつきが有ることもあり、それでなくても少ない練習時間が足りなくなることが多かったのです。

さらに、この頃は若い副指揮者がいて、昼の練習は副指揮者、夜の練習は荒谷正雄氏、同じ曲も要求が違って、経験の浅い楽団員が戸惑う場面が発生、正団員の中の若い楽団員は自分たちの音楽経験に比較的近い副指揮者に共感して、それでなくても少ない正団員がさらに感情的に二分されそうになりました。

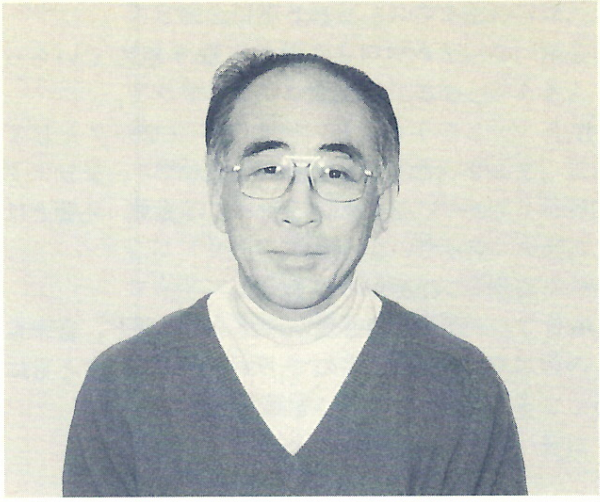
そうした中、親睦を目的に楽員会が生まれました。現在、石狩市にお住まいの高橋裕典氏が草案を起草し、昼の練習が終わってから、中島児童会館の工作室に集まって侃々諤々と議論を続け、苦労して最初の楽員会会則が生まれました。初代会長には佐々木伸浩氏を選び、正団員も準団員も一緒になって海や山へレクリエーションに励みました。

正団員にとって、アンサンブル上での不満の解消には役に立たなかったのですが、それが人間関係にまで広がるのを防ぐ大きな役割を果たしました。　（Y.T.）

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　チェロ奏者

北市（きたいち） 勝年（かつとし） さん



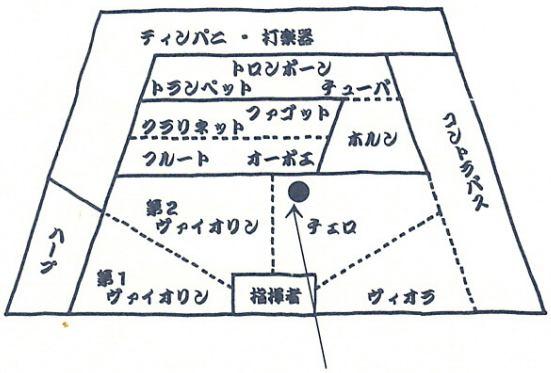
高校にあった弦楽器が将来を決める

滝川市の出身で、母が幼稚園の園長をしていたので、幼稚園にあったピアノを小さい頃から楽しんでいました。音楽の勉強は中学一年生から始めました。ピアノ、声楽などです。町にあった合唱団にも入りました。高校は赤平高校に行きましたが、どういう訳か高校には弦楽器があり、見よう見まねで覚え、弦楽器の持つすばらしさを体験しました。そんなこともあって、大学は北海道学芸大学(現教育大)にすすみました。

札響創立から団員に

大学を卒業すると同時に、その年に創立することになった札響に入団しました。その時は確か、正団員が19人で、アマチュアの準団員も入れて全部で50人ぐらいのメンバーだったと思います。チェロは最初私ひとりで、ようやく１ヶ月後に２人増えて３人になりました。

今では世代交代もすすみ、創立からの楽員は私ひとりになってしまいました。その私も今年の４月30日の演奏会をもって定年退職するので、創立当時からの楽員は誰もいなくなってしまうことになります。



北市さんの位置はこのあたり

札響の配置

夏は暖房、冬は冷房？

札響の創立の頃は、今のように環境も整っているわけではなく、苦労の連続でしたが、今になってみれば楽しい思い出ばかりです。

練習会場も夏は暖房、冬は冷房という所で、冬などはオーケストラの配置の関係で、チェロはストーブのすぐ脇が定位置で、ガンガン真っ赤になるまで焚いたストーブの熱さで失神しそうになったこともありました。一方、真ん中に陣取っている管楽器の連中にはさっぱり暖気がまわらず、ピストンも押せないほど手がかじかんでいたそうです。

創立当初は半数以上が準団員だったため地方公演には行けませんでしたが、翌年から学校の音楽教室として地方へ行き始めました。音楽教室、公演を問わず、会場は体育館でやることが多く、本番では音の大きい暖房機をつけっぱなしにする訳にはいかなく、寒さにふるえながら演奏したこともしばしばありました。

今では考えられないようなことを経験することができ、ずいぶんと自分自身の肥やしになりました。

人柄が演奏に現れたP.シュバルツ氏

札響に入って、数多くの指揮者やソリストと一緒に演奏してきましたが、やはり演奏家としては納得のいく演奏ができ、みんなと喜びを分かちあえるようなときにやっててよかったと思うものです。

印象に残る指揮者としては小沢征爾氏がそのひとりにあげられます。練習時間は通常の半分程度だったと記憶していますが、吸い込まれるような感動を覚えました。生涯に残る最高の思い出です。

歴代の札響の指揮者の中では特にペーター・シュバルツ氏と共に過ごした時期が忘れられません。

案外知られていないことですが、P.シュバルツ氏はドイツのバンベルク交響楽団の首席チェリストをつとめていたことがあり、弦楽器、特にチェロには

大変造けいが深いのです。私個人的にも教えていただきましたし、よくお付き合いもさせていただきました。演奏上では、ベートーヴェンやモーツァルトを得意とされており、あの心に染みわたるような音楽は今でも忘れられません。お人柄がそのまま演奏になって現れるといった感じです。

限りない可能性を持つ札響

先ほども述べましたように、私は札響創立期の唯一の生き残りとなってしまいました。5月からはまさに2順目に入るわけで、感慨もひとしおです。

最近は優秀で個々に高い技術をもった若い人たちもどんどん入団し、これからが楽しみですが、オーケストラは団体であるということを忘れずにがんばって欲しいものだと思っております。自分たちの持っている能力を札響の音づくりのために、みんなで一つ一つの音を作るために発揮して欲しいと思います。今の若い人たちは良くも悪くもドライな傾向があると思いますが、それぞれに力を持っているのですから、その力が一つにまとまれば、もっともっとよいサウンドをつくり上げることができると思います。そのためには、日頃の人間的な付き合いなども大事にしてほしいものです。

聴衆の皆さんもどしどしご意見を

付き合いといえば、聴衆の皆さんにも演奏終了後、遠慮せずに、どんどん楽屋に入ってきて欲しいものです。良かったときも悪かったときも、率直に感想を聞かせてもらえば我々もとても勉強になります。

私たちも悪いのですが、演奏家と聴衆の間にはまだまだ垣根があるように思います。

比較的最近のことですが、同じマンションに住む高校生が9時半ごろに訪ねてきて、「今日の演奏は大変感動しました。」とわざわざ言いに来てくれたんですが、その時は本当にうれしかったです。

演奏家といえども特殊な人間ではありませんので、気軽に声をかけて下さい。お願いします。

これからは音楽を楽しみながら

退団後も今までと変わらず、チェロを教えていく予定です。

20数年指導している札医大の合奏団とも付き合っていくつもりですが、これからは、ゆっくりと音楽を楽しむことをしたいと思っています。妻もピアノを弾くので、音楽には理解があるものとして長年過ごしてきましたが、今考えれば、随分苦労をかけてきましたので、妻と共にゆっくりと過ごしたいと思います。また、息子には小さいころ音楽を厳しく指導しすぎたせいか、音楽をあきらめてサラリーマンになってしまったので、生まれて間もない孫にはできれば音楽家になってもらえればと願っております。

(崇)

from 「札響くらぶ」

98年の年も明け、あっという間に雪祭りまで終わってしまいました。長野オリンピックの開会式では、あらためて第九の持つ力、音楽が持つ人と人をつなぐ力というものに感じ入ったというところです。

新しい年、札響にとってどんな年になるでしょうか。そして私たち札響のファンにとって札響とどんな新しい関係を築いてゆくことができるでしょうか。今年も、「札響くらぶ」の会員の皆さん、よろしくお願いいたします。

さて、昨年11月27日には「札響くらぶ」と札響団員の交流会を持ちました。この企画はもう3回目になりますが、だんだん会員と団員の方々との距離が近くなってきたような、そんな気がします。リラックスした雰囲気の中で、演奏家と聴衆が同じフロアで杯を交わし、今年のあの演奏会はよかった、あれはいまいちだったなど、札響の音楽を語る輪がいくつもできる、演奏家と聴衆が近所に住んでいることを知って、親しみの度合いが一挙に深まる、そんな話題の一つ一つが楽しい。

そんな中で、自然に新しいホールの空席を埋めるためにはどうしたらよいかといった議論も生まれてきました。たぶん、札響の音楽的力量が札響を取り巻く地域の人と人をつなぐ力に発展してゆくためには、「札響くらぶ」のような地道な活動を長く続けることが必要なのだろうと思っています。

どんな企画をするかを考え、そしてそれを実行するには少なからず人手を要します。会員の皆様方の中で、ボランティアで活動に協力していただける方、事務局にご連絡ください。また、時間のない方でもアイディアを提供していただける方、どんどん手紙・FAX・電話何でも結構です。御意見をお待ちしております。もちろん、新しいくらぶ会員のご紹介でも大歓迎です。年会費は3,000円です。

今年も、「札響くらぶ」とともに楽しく元気にいきましょう。

FAN NETWORK

私もお手伝いを！

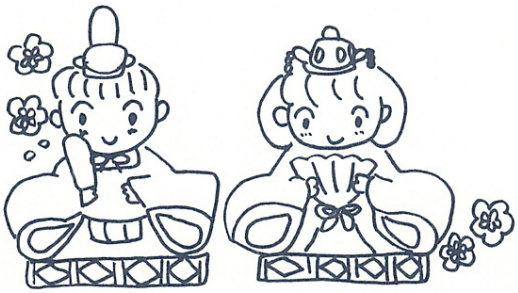
私は札響のファンになって、まだ半年ぐらいです。きっかけはプレーヤーのうち１人のファンになったことでした。

初めて聴く生のオーケストラ。その迫力には圧倒されてました。ハイドンの『告別』では、ドキドキの連続で、私はすっかり興奮状態でした。その日の終演後、札響の定期会員になったことは言うまでもありません。

私は素人なので、その日の出来の良し悪しなど、音楽的なことは分かりません。曲を知らなくても、終わった時に感動していることもよくあるので、素人だから感じられることもあると思っています。

せっかく音楽専用ホールが出来て、札響の演奏会は、ほとんどここで行われるのだから、もっと多くの人に生で聴いてもらえるといいのにと思っています。

定期会場でいただいた「札響くらぶ」という会報を読んでいて、色々と思うことがあったので、手紙を書きました。札響を応援するのであれば、札響のことを知っていた方がいいと思うのです。



指揮者は別として、プレーヤーのことはもう少し知りたいですね。今、80人でしたか？ PLAYER'S TALKは１人ずつだと80号までかかってしまうので、たとえば全員にアンケートとかパートごとの対談形式にするとか、そういうものもいかがでしょう。あと、練習のすすめ方とか。演奏旅行があれば、その先々でのエピソードとかファンとして知りたいことって、結構あるんです。使っている楽器のことも知りたいと思います。他は音楽的なこと。得意な曲とか、好きな作曲家とか全部アンケートの内容になってしまうかもしれません。

あとは、そう、普通のファンでは入れないリハーサル室とか舞台裏の光景とかステージから客席がどう見えるかなども知りたいですね。

とにかく、地元のオーケストラです。みんなで「よいっしょ」と支えたいと思っています。また、私で出来ることがあれば、会報づくりもお手伝いいたします。

札幌　菅原尚美

編集後記

「札響くらぶ」も３年目を迎え、第５号を発行することができました。記事を寄せて下さった方々、取材に快く応じて下さった方々、ありがとうございました。

今回は事務局に届いた会員の方からの投書を「FAN NETWORK」に掲載いたしました。札響が大好きだという菅原さんのお気持ちがあふれる文章とともに、「札響くらぶ」にもお力をお貸しいただけるという心強いお申し出に、「札響くらぶ」事務局一同、非常にうれしく思いました。多くの会員の皆様から、より一層のご意見をお聞かせ下さい。

話は変わりますが、３月～４月は札響の定期会員の更新の時期です。毎年、何人かの定期会員の方が札幌を離れてしまいます。あなたの職場やご近所に、新たに札幌市民・北海道民となった方がいらっしゃいましたら、是非札響のことを紹介して下さい。実は、「札響くらぶ」の編集部にも第５号を最後に編集部を離れる方もいますが、本号から新たに加わった方もいます。そんなところにも年度末を感じる今日この頃です。

北の地に住む私たちの札響をもっともっと応援しましょう。　（いちろう）

次号の「札響くらぶ」は５月発行の予定です。